



朝鮮通信使が来日して400周年を迎える今年、外交の重要な舞台となった対馬に日韓の若者が集い、その歴史と外交精神を学び、今後の国際交流のあり方について考える「通信使外交塾」が、7月20日～23日まで開かれました。

朝鮮通信使の歴史や精神を学び、

今後の交流について考えた4日間

通信使外交塾に日韓の若者28名が参加

「ここでの縁を大切に、今後も交流を続けよう」

このイベントは、朝鮮通信使縁地連絡協議会や対馬市などで構成する同実行委員会が主催したもので、塾には、一般公募で集まった20代を中心とする日本と韓国の若者28名が参加しました。

韓国からの参加者は多くが大学生で、その他社会人も含め参加した18人全員が日本語に堪能でした。一方、日本からは、福岡や東京、地元対馬から学生や公務員など10人が参加しました。

通信使と対馬の歴史について学び、対馬の自然を体験した塾生たちは、期間中に開かれた厳原町の県立対馬歴史民俗資料館30周年事業の特別企画展「対馬にのこる日韓交流の礎」の見学や、対馬市交流センターで開かれたシンポジウム「日韓の架け橋・対馬」をはじめ、韓国釜山大学の朴教授による講義「対馬と倭館」等を受講。通信使の果たした平和への役割や、朝鮮国との友好関係に努力した対馬藩の歴史などについて学びました。

また、学習以外では、遊覧船での浅茅湾クルーズや、美

花火を楽しむ塾生たち



津島町の勝見浦で海水浴を体験。島外からの参加者は、その透き通った海水や美しい砂浜に感動していた様子でした。韓国からの参加者の中には、海で泳ぐことが初めてという人もいて、感激した様子でした。泳いだ後の海岸では、バーベキューや花火で楽しいひとときを過ごしました。

今後の交流の発展へ向けて、再会を約束した塾生たち。プログラムの最終日には、5〜6人ずつに分かれたグループごとに、塾で学んだことを踏まえて、今後の日韓交流のあり方について意見を発表しました。

あるグループは「江戸時代

に往復約5〜8月かかった通信使の時代と比べ、現在は比べものにならないくらい自由で頻繁に往來することができ、また電話や電子メールなどを使得て連絡できることを考えれば、私たちはもっと仲良くできるはず。交流する機会を増やす努力を続けられ、もっとより良い関係になれる」と発表しました。

個人と個人の民間交流が広まることで、国と国との交流もよりよい方向に向いていくはず。

塾生たちは別れ際に、今回の交流を通して知り合った仲間たちと、電話番号やメールアドレスを交換し、再会を約束していました。



平成19年度 しま自慢観光カレッジが開校 観光のプロを目指し51人が受講 女優の黒田福美さんが講演

観光の先導役の育成を目指す平成19年度対馬地区「しま自慢観光カレッジ」が6月24日、対馬市交流センターで開校しました。

このカレッジは、内閣総理大臣認定の「地域再生計画」事業で受講料は無料。全国的に活躍する観光のプロを講師に招き、講座、実践訓練などを通して島の活性化を担う観光のプロを養成するもので、今年で3年目となります。

第1回目の講座は韓国通で知られる女優の黒田福美さんが講師を務め「もう辺境とは言わせない！〜対馬の魅力を考える〜」と題し、対馬の観光の活性化について講演しました。

これまでも、対馬を訪問したところのある黒田さんは、自分でソウルのガイドブックを出版した経験をもとに、対馬での観光のあり方について話し、面積が広く移動手段も限られている対馬では、島内を地域別に分け、その区域内で出来ることを紹介するようなガイドブックを作ってみてはと提案。また、対馬で生産される品質の良い真珠を活かして対馬を「東洋の真珠」としてPRすれば、都会の人達にも興味を持つてもらえるのではないかと提案し、受講生の関心を集めていました。



今後カレッジでは、観光についての基礎知識を学ぶ共通講座や観光ガイド、商品開発クリエイターなどの4コースの専門分野に分かれて、実践講座などが実施され、受講後には県認定の修了証書が交付されます。

（写真）対馬の活性化について講演する黒田福美さん

黒田福美さんは、対馬を訪問したところのある黒田さんは、自分でソウルのガイドブックを出版した経験をもとに、対馬での観光のあり方について話し、面積が広く移動手段も限られている対馬では、島内を地域別に分け、その区域内で出来ることを紹介するようなガイドブックを作ってみてはと提案。また、対馬で生産される品質の良い真珠を活かして対馬を「東洋の真珠」としてPRすれば、都会の人達にも興味を持つてもらえるのではないかと提案し、受講生の関心を集めていました。

（写真）対馬の活性化について講演する黒田福美さん

黒田福美さん

シリーズ「人権教育総合推進地域事業」の取組 その

「子どもとメディア」講演会が開催されました

7月6日、「人権教育総合推進地域事業」の推進協力校である佐護小学校で、PTA主催の研修会として、NPO法人「子どもとメディア」常務理事の宮本智子さんを招き、「子どもとメディア」というテーマで講演会が開かれました。

講演で宮本さんは、日本の子どもたちがテレビやゲーム・パソコン・携帯電話などの電子メディアに触れる（見たり遊んだりする）時間が世界一長く、一日平均5時間、1年間では1825時間にも上り、中学生が学校で勉強する時間（約1000時間）の倍近くになることや、そのことが子どもの生活リズムや身体（視力や背筋・脳の働きなど）に悪影響を及ぼしていることを指摘しました。

そして、子どもたちの健やかな成長を維持するためには、学校だけでなく家庭や地域で、子どもを取り巻く環境に対して大人が気を配ることが重要だと講演しました。



講師の宮本智子さん

研修後の感想では、「週に1回テレビをつけない日を作る」、「だから見ないで親子で相談して番組を選ぶ」、「食事中はテレビを消して家族で会話する」など、それぞれの家庭でできるノーテレビ（テレビを消す）に取り組んでみたいという声も多数聞かれました。

佐護小中学校の教育週間中の活動はホームページ（<http://www5.ocn.ne.jp/~sago/top.html>）にも掲載されていますので、ぜひご覧ください。



参加した保護者の皆さん